『白大夫』覺書

鴫澤孝輔

文樂座の二月興行に『賀の祝』が出たので、榮三には久し振りの「白大夫」が附いた。『菅原』の通しなら菅丞相と松王丸とを持役にしてゐる人であるから、この「白大夫」は『賀の祝』が單獨に出る時に限られてゐる。文樂が四つ橋に移つてから二度目、昭和八年十月、土佐大夫の役場として上演されて以來の事と思ふ。

「白大夫」といふ特殊なかしらがあるやうに「白大夫」の性根は相當複雜である。茶筅酒の氣さくさ。それも内には櫻丸を切腹さす親として最大の悲しみを包んでゐねばならぬ。そして訴訟では親の威厳と慈悲とを最後に切腹に臨んでは、これを介錯せねばならない憂悶を表現せねばならない。誠に榮三の如き名手には打ってつけの役でありそれだけ野心も持ち得るわけである。以下榮三の演技の見たまゝを列べて見る。素より「型」と呼ぶ程專門的なものでもなければ、正確なものでもない。筆者の單なるノートで、見誤りもあらうし、表現の至らないところも多からうと思ふので、この點は豫め榮三師にも讀者諸兄にも御諒解願っておかねばならない。

▽…「人に知られし四郎九郎」で本手下手から輕く足拍子を入れて、箒を手にして現れ、直ぐ船底へ降りて上手へ行き、垣を巡らした菅丞相の愛樹梅松櫻を眺めてから、その前を掃き、そして正面から下手の井筒の方へ掃いて行って「畑の世話より氣樂なり」で箒を下において屋合の下手から這入る。

▽…下手寄りに坐ると、十作が來てやりとりがあり、朝茶の塩にも喰足らねどの邊りから手を振って「サイノ、菅丞相樣のふって湧いた御難儀を、下に住むおらゝが身祝ひ」と右の手で自分を指差し「どころぢやなけれど……彼岸團子程な餅七つ宛配つたはこの四郎九郎丁度七十」左手を出して眺め「この春年頭のお禮に上った時おらが年をお尋ね、七十と申したりや、古來稀な長生」首を前後に動かし同時に膝を直す「其上珍らしい三つ子の爺親。禁裏から御扶持下され、伴共は御所の舍人」右の手を出し「……產れ月、產れ日、產れ出た刻限違へず」左手の掌を右の手で指差し「七十の賀を祝へ、其日から名も更へとて、ノウ聞かしやれ」右の手を二度程動かして見せて「…白黑まんだらかいは帶溜へ投つて退け」と前に出した兩手を同時に下手の方へ投げ捨てる形に動かし「今日から白大夫といふ程に」右手を横から叩くやうにして「さう心得て下され」と十作の方を二三度指差す

▽…十作が三つ子の親に扶持を下される理由を問ふので「サイノ死んだ女房が產んだ時は邊り隣りの外聞。ひよんな事ぢやと思うたが」右の手を頭へやり「勿怪の幸ひ三つ子の爺親一代は作り取りの田地三反」左の掌を右の手で打って見せ「……男の子なりや御所の牛飼、女郎なればあづま……」

と額に手をやつて考へ「わらべとやら」となる。「そちの嬶も若い程に、產ますならおらに育りや」と右の手で鼻の先を撫でゝ體を上手へねじらせ、首を突出して肩で笑ふ。後煙管を取つて喫ふ。

▽…八重が來る。十作がコレ四郎九殿、お客さうなもう往にましよと云ふので「エヽ四郎九郎とは物覺えが惡い十作、白大夫はや忘りやつたかいの」と自分を指差し、十作の名酒の催促で「ハレヤレ盛つた酒呑まぬとは」首を左に振つて「但しは まだ呑足らぬか」と十作の方を二三度指差し「……樽や德利は目に立つ故、餅の上へ茶筅の先で、酒塩打つてやつたので」左の掌に右の手で酒塩を打つ仕介があつて「二度の祝ひ濟んだぢやないか」と手を上下に 動かして膝を直し、兩手を膝の上におく。十作歸る

▽…下手の八重に向つて「嫁女アレ聞きやつたか」となり「……晩に來て寢酒たべう」と手を動かし「ハヽヽヽ」首を左にひねつて笑ひ「アヽせち賢い懇ぶり」と云ふと、八重が聞きも及ばぬ茶筅酒と笑ふので相笑ひとなり「ハヽヽ」少し手を上げ「ハヽヽ」體を反らせ「ハヽヽ」再び體を反らせ、最後の「ハヽヽヽ」で右の手を口に翳して笑ひ「嫁と舅の睦しさ」で八重に肩を揉んで呉れとの仕介。

▽…千代、春との出の間、八重は後へまはつて左の腕、右の腕を撫で下し、それから肩を叩く。千代と春とが門口で讓り合ふので、八重の手を拂ひ、起つて行つて「一時に產れた三つ子の嫁ども、先の後の所かい」となり「…どちこちなしに這入れ〳〵」と兩手を同時に上手の方へ振つて「來た〳〵〳〵〳〵」と左右の手を交互に出して足拍子を入れて元の座へ戻つて、坐つて煙管を咬へる。

▽…料理の事を尋ねられるので、煙管を持つた手を膝におき、首を振つて「イヤ出來てない、和御女達にさす合點云々」となる「……大根も芋も」で吹殼を叩き「そこに有る」と煙管で仕介があつてから、下におき「膝手は知るまい。ヤアえい〳〵」と右膝に兩手をかけて起上る。千代と春とが止める。「さうぢやてゝ立つた序」と云つて足拍子を入れて下手の棚の所へ行き、椀を載せた膳を持つて正面に戻つて坐り「コレ〳〵これ見や。祖父の代から傳はつた根來椀ぢや」と左右の手に一つ宛椀を取つて見せ「折敷も十枚」椀を持つたまゝの右の手で膳を數へるやうに動かし「おらが息災なもこの椀折敷。堅地なとてかんまへて」右の椀で左の椀を差し「手荒う當るな」左右から打合せて見せ「よ、め、ぢよ、た、ち」と足拍子を入れて左右の椀を交互に前に突出し、最後に二つを揃へて出して極る。

▽…「このマア伜どもはなぜ遲い。來るまで一斟と、體を横に差枕」で最初、頭を下手へやつて横に寢ると、八重が枕を當てがはうとするので、一旦起き上り上手斜向きとなり梅松櫻に對して右の手を平に上げて拜んでから「堅地作りの」となつて今度は頭を框の方にやつて枕をして縱に寢る。後嫁達の賑やかな料理拵へが始まる。

▽…「白大夫目を覺し」で起上り、時平の車先での喧嘩の樣子を尋ねると、嫁達の壁訴訟となる「……喧嘩の筋知つてゐてもいはぬか。同じ胤腹」左の二の腕を叩いて見せ「一時に生れた伜でも心は別々」と首を振り「……マア大概類が似れば心もよう似て」右の手で胸を押へ「兄弟の中もよいものぢや」と向ふを見る「おらが伜共誰が見

ても一作とは思はぬ、生ぬるこい櫻丸が顏付」右の手で自分の顏を丸く撫で「理窟めいた梅王が人相」肩を威らせ膝を動かし「見るからどうやら根性の惡さうな松王が」憎々さうに向ふを二三度指差し「面構」と向ふを見乍ら腰を浮すと、下手の千代と顏が合ふので、前に出した兩手を脇に引いて「ヤ、、、」と首を振り「千代が傍で家相いうた、氣にかけてたもんな」と腰を下して手を振る。

▽…「ヤアとかういふ中もう七つぢや」と上手の空を見上げて「おれが生れたは申の刻限云々」となる。嫁達が夫を迎へて來やうといふので「ェ、鈍な嫁共」で右の手を叩くやうに振つて「そこに居るを得知らぬかい、コレ三本のあの木が子供等、梅王」と梅の木を指差し「松王」と松の木を指差し「櫻丸」と櫻の木を指差し「顏は殘らず揃うてあれ」と首を下手の嫁達の方へかしげる。

▽…八重の手で膳が運ばれる、それから庭の三本の木を夫になぞらへて夫々の女房が膳を据ゑることあつて、親父樣目出たうお祭なされませと云ふので「親がひに座が高い」と兩手を膝頭に支へて起上ると千代と春とが止める「……親でも子でも極まつた辭儀作法」と下手から屋台を出で、船底へ降りて三本の木の前に畏り「子供衆、何も御座らずとも斯うまゐつて下されい」と頭を下げ「ア、これ〳〵」手を振つて「親が折角おりての辭儀、辭儀返したうても動かれぬは知れてある。爰で〳〵」と梅の木に向つて手で押へ、次に松の木に向つて押へ、最後の「こゝで」で櫻の木を見、同じやうに押へやうとして憂ひを見せてから氣を換へて「ハ、、、」と笑ひ「嫁達餅を春やいの」といつて右足を出すとそのまゝ兩足を投げ出して腰を落すのが「尻もちついて悦び笑ひ」である。起上つてそのまゝ屋台へ這入る。

▽…「わが膳に押直り」から箸をとつて味ふ仕介があつて「……給仕も偏いきせぬ樣に三杯は喰ふ合點で」の次の「おぢやらしまするぢやなんよえ」と首をまはし歌ひ乍ら椀に突立てた箸を靜かに廻してから、その箸で椀の緣を叩いて、フト顏を上げると、これより曩に八重が前に据ゑておいた三方が目に入るので「こりや新しい三方土器誰が持つて來ましたぞ」と問ひ「ハテ氣が付いて添い」と八重を一寸見てから、やゝ上手向きとなつて憂ひを見せて首を垂れ氣を換へて下手向きで箸を眞直ぐに立てゝ握つた手を膝において「春も何ぞくれるかい」と催促する。春が三本の扇を出し、千代が頭巾を出す間に箸を頂いて箸紙に納め椀の蓋をする。氏神へ參るとて頭巾を被り羽織を着、賽錢と扇とを持つて八重を伴ひ、輕く足拍子を入れて下手の横幕へ這入る。

▽…梅王松王の喧嘩で櫻の枝が折れる「あらずもどられし」で下手から輕く足拍子を入れ、腰の後に兩手を組んで現れ、下手寄りの所に止つて、連れ立つた八重を振り返つて頷き、そのまゝ屋台に入り、眞中に正面となるのが「年は寄つても怖いは親」で、兩手を後に組んだまゝの立身で梅王松王の祝儀の詞を受け「塵を捻らぬばかりなり」で上手の梅王夫婦、下手の松王夫婦を見下し「親はほや〳〵機嫌顏」で左右の足を前後に動かすと同時に首を振つて、今日の祝ひは仕舞うたと云ひ「折れた櫻は見ながらも」で上手に目をやつて櫻の枝の折れてゐるのに初めて氣付き、ハッとして顏を

そむけ「誰が所爲ぞと咎めもせず」で右足を浮かして體を上手へ傾け再び櫻の木を眺め「呵る所を呵らぬ親」右の足を出して又元に戻し「一物ありと知られたり」首を左に捻ってから、上半身を伸び上るやうにして極る

▽…梅王、松王の訴訟を立身のまゝで聞き「……いひ合せたる如くなり」で先づ松王を、次に梅王を見下し「白大夫打笑ひ」體を前後に動かせて笑ひ「……願ひあらば口ではいはいで、ぎっとした此書付」足元に置かれた二人の願書を見下し「さらばおらもぎっとして」懐に入れた手を腰骨のところに支へるので肩が威った形となり「代官所の格で捌く」右の足をまはして前に出し左の足を同じ樣に出し再び右足を出してから左足を上げて、首をまはして云ふ。座蒲團の上に坐って黑緣の眼鏡をかけ先づ梅王の願書を讀み、眼鏡越しに梅王を見下してから封に納め、次に松王の願書を讀み、ギックリすることがあって同じく松王を見下し、これも封に納めて眼鏡をはづす。

▽…先づ梅王に向って兩手を膝に置いて「こりや梅王、そちが願ひに旅へ立つ隙くれとは、ムゝ」と考へ「推量するに外でもあるまい、菅丞相のござる島か」と體をのり出し「ムゝ恩を知らねば人面獸心というてな、顏は人でも」と自分の顏を指差し「心は畜生」と右の手で胸を打ち「島へ參って御奉公がしたいとは、まんざら」首を振って「恩を辨へぬ畜生氣は離れた心。コリャヤイ、御台樣や若君樣お變りも遊ばされず、ござる所も知れた上」右の手を前から右へ移し「旅立の願ひぢやな」と體を前後に搖って力强く云ふ。梅王が菅秀才の御事は慥にと云ふので双方から顏を見合ふが、梅王が松王を眥戒して云ひ誑るので白大夫は正面となる。そして「ヤイ馬鹿者」と體をのり出し「……在家も知らず、それでおのれ忠義が濟むか」と右の手を突出して體をふるはせ「……尤も御不自由な配所のお住居」左手を下について右の手を敬ひの心で頂き「お傍へ參って御用を聞く膝行役の奉公はこの白大夫がよい役ぢやわい。血氣盛り奉公盛り」左の肩を突出し次に右の肩を突出し「菅丞相の所緣とあれば、根掘り葉掘り絶やさんとて鵜の目鷹の目」右で袖屏風を作って左の手で松王を指差し「……すはといふ時身を惜まず、御用に立つ所存はなうて膝行役を願ふは命が惜いか」右の手を出し「敵が怖いか」床を叩き「旅立ちの願ひ叶はぬ〳〵取上げぬ」と首を振り願書を梅王に投げ返す。

▽…下手松王の方に向き直り「ヤイ松王そちが此願ひを見れば」願書を指差し「勘當を受けたいとな、ハアハヽヽ」と體を搖り、右の手を一寸出して笑ひ「神武天皇樣以來珍しい願ひぢやな……聞屆けてくれるぞ」とその願書を左脇に直す。松王が主人へ忠義推量あっての事なるべしと云ふので「いかさま口は調法な物ぢやな」と松王を指差して體を反らせて笑ひ「……道も道によってな、横に取って行く道を蟹忠義といふわいやい」と左の手首と右の手首とを交互に動かしてから床を叩き「……勘當請ければ兄弟の緣も離れ、時平殿へ敵對はゞ切って捨てん所存よな」と右の手で切る仕介を見せ「……親の心に背くをな、天道に背くといふわい」右の手で空を指差し「望み叶へてとらする上は人外め早や歸れ」と下手寄りから船底に足を降し、箒を取って下を打ち振上げるのが「竹箒くらはさうと筋骨

立てゝ怒る聲」である。千代が名殘を惜しむ所で、以前の頭巾を脱いで投げつけ、再び袴を取つて下を打ち振上げて松王の肩先へ投げつける。松王夫婦去る。

▽…「ハレヤレ嬉しや面倒な奴片付けた」と輕く足拍子を入れて眞中に戻つて坐り、上手の梅王を見て「そこな馬鹿者」とキッとなり「御台若君の御行方等ねにいかぬかうせぬか」と云つて、「……出て行け〳〵」と敷いてゐた座蒲團を二つに折つて梅王に投げつけ、カッ〳〵と掛け聲を入れて睨む梅王夫婦が歸る「夫婦は門へ」で以前の三方を左脇に取つて、八重を見て憂ひを見せ首を垂れるが、氣を換へて「白大夫は唾を呑込んで」三方を持つて右膝から力なく起上り、徐ろに上手の障子屋台へ這入る。

▽…愈々櫻丸の切腹となる。「暫くあつて白大夫」で上衣をはねて卵色の襦袢を見せた姿となり、腹切刀を戴せた三方を兩手に持つて上手の障子屋台から現はれる。最初左足を踏み出すが、上半身がガックリ後に殘る樣を見せ、二歩三歩四歩五歩と運び次の六歩目を出すと「あーしーよーわ」となつて、足拍子を入れて後へタジ〳〵と退り「車」で立直つて前に出で「舍人櫻が前に監き」で櫻丸の上手に坐り、三方を前に据ゑ「用意よくば とく〳〵」櫻丸の顏を見て、首を低く垂れ、八重がこりや何ぢや親父樣の詞で正面向きとなつて袖で涙を押へる。櫻丸の述懷、八重のくどきがあつて、親父樣の思案はないか、俯向いてばかりどざらずとも、よい智慧出して下さりませと八重が下手から膝にとり付いて搖すつて顏を見上げるが、首を深く垂れて動かない。

▽…「白大夫顏ふり上げ」で右の手に握つた手拭で涙を拭いてから下手櫻丸、八重の方へ向き「子に死ねといふ腹切刀。むごい親と思ふ言譯ではなけれども」體を上手へねぢらせて震はせ「この曉はわが身の祝ひ……門の戸明くれば」兩手を左右に開き「櫻丸……樣子を聞けば右の次第」右の手を出して首を垂れて憂ひを見せ「白大夫づれが伴には驚き入つた健氣者」首を大きく動かし「とゞめても聞入れず」首を靜かに振り「今日の祝儀しまふ迄、女房が來ても逢はしはせぬ」首と手とを同時に振り「おれが出いといふ迄は納戸の内に隱れて居いと」右の手を出して、後首を垂れる「……助けてよいか惡いかはおらが了簡に及ばず」右の手を胸に當て「神明の加護に任さんと」左手を下につき、右の手を平にしていただき「祝儀にくれた扇三本」右前においた扇を指差してから取上げ「幸ひ繪には梅松櫻子供の行末祈る顏で氏神の祠へ直し置き」右の扇を頂いて下におき「信を取つて御圖の立願」兩手を力强く合せて拜み「櫻丸が命乞ひ、中の繪は上から見えぬ三本の此扇初手に櫻を」再び手を合せ「とらしてたび給へ」と首でこなしあつて「再拜祈念」首を下げ「取上げて扇開けば梅の花」右の手に一本の扇をとつて開くと梅の繪である、顏をそむけて、輕く扇面を動かし「南無三それは叶はぬ告げか」とその扇を下におき「神の心疑ふ御圖の取直しせぬものなれども助けたいが一ばいで取直す次の扇」次の扇をとつて開くと松の繪である「今度も違うて又松の繪」顏をそむけて、同じく輕く扇面を動かし、これを左手にとり直し、右の手に梅の繪の扇をとり上げ「頼みも力も落ち果てゝ」右の扇を上に翳して見上げ、次に左の扇を同じく翳して見上げ、少し腰を浮かして二つの扇を前に列べて見下して離

すと、扇は静かに落ちる。「下向すりや折れた櫻」上手の櫻の木を眺め「定業と諦めて腹切刀渡す親。思ひ切っておれや泣かぬそなたも泣きやんな」手拭を握った手で八重の泣くのを遮って「ヤ、ヤ、ヽ」と繰返し、最後に八重と共に泣き乍ら足拍子を入れて両手をふるはせ膝を動かして正面となり左手を下に右手の手拭を額に當てる。

▽…櫻丸は三方を取って戴く、白大夫はこれを見て首をふるはせ、左の手を少し浮かして膝の上に戻す「白大夫目をしばたゝき」涙を拭いて下手向きとなり「潔い伴が切腹」右手を出し「介錯は親がする。その刀コレ見やれ」と懐から擔木と鉦とをとり出し前に置き「コレこの刀で介錯すれば」右の手にとった擔木を櫻丸の前に出して見せ「未來永劫迷はぬ功力」と首をまはし「利劍即是彌陀號」と左手を上げて拜み「擔木を取って打鳴らす」鉦を打ち「鉦もしどろに」で續いて鉦「南無あみだ」鉦、「南無あみだ」鉦「南無あみだ」鉦「南無あみだアア……」櫻丸を見て泣き「南無あみだア……」鉦「南無あみだ」鉦、鉦「南無あみだ」再び櫻丸を見て身悶へし「アハ……」と泣いて鉦「南無あみだワア……」三度櫻丸を見て顔をそむけ泣いてトヾ両手を下につく

▽…櫻丸脇腹を突く。白大夫その姿を見て顔をそむけて體をふるはせてから両手を膝において堪え「……打つ鉦も、拍子亂れて南無あみだ〜〜〜〜〜」と鉦を打ち、打ち損じて床を打つこと數度、後上半身が折れた樣に首を垂れる。櫻丸が介錯を促すので「ヲヽ介錯と後へ廻り擔木振上げ」左手に鉦を持って起上り、櫻丸の傍に寄り擔木振上げ「南無阿彌陀佛」と、櫻丸の耳元に鉦を打つのが「打つや此世の別れの念佛」で、櫻丸が喉の吭を切ると、鉦と擔木とを下において、その肩にとりついて泣く。

▽…八重が自害をしかゝるので梅王夫婦が出て止め櫻丸の死を悔む事があって「是非も涙に」となって白大夫は左手で拜み擔木を振上げて「南無阿彌陀佛と鉦打納め」で鉦を打ち「擔木とかはる杖と笠」で力なく起上って、輕く足拍子を入れて納戸へ這入る。

▽…「島へ赴く現世の旅立」で旅裝束となって納戸から出で櫻丸の死骸の下手に坐り「この亡骸梅王夫婦顧むぞと」で上手の梅王夫婦に向って右の手を出して頼む仕介があり「八重が事迄つど〜〜に」下手の八重を指差してこなし「頼む詞の置土產冥途のみやげは只念佛」で、左右の手甲の紐を口で締め「南無阿彌陀佛〜〜」の間右の膝を立てて脚袴を締め、次に同じく左の脚袴を締め起上って下手の出入口で八重の介添へで草鞋をはき「南無あみだ笠打被り」で右に杖、左に菅笠を持って、八重と共に船底へ降りる。下手寄りの勾欄の所で跪り杖を持ったまゝの右の手で屋台の内の梅王を指して八重と共に頷き合ひ「西へ行く足」の絃に合せて杖に縋って起上り「……生きての忠義」で笠を持ったまゝの左手で梅王を指し「死したる義臣」で死骸の前に膝をついて櫻丸の顔を見上げ（この時梅王は鉦を打つ）「一樹は枯れし無常の櫻」で足拍子を入れて上手に進んで右の手、左の手とを交互に櫻の木を指差し後に退って正面となり膝をつくと「櫻」の後の絃に合せて足拍子を入れて杖に縋って起上り「殘る二樹は松王梅王」で再び木の前に戻って杖を振上げて松の木を叩き足拍子を入れて下手へ來ると「末世にそれと白大夫」となり振返り「佐太の社」で足拍子を入れて、ツカ〜〜と櫻丸の死骸の前に跪り、梅王夫婦と八重とが死骸を起すので、両手を合せて拜むと「舊跡も神の惠と」となって幕。（十五日目見物）